

平成 26 年度

第 59 回 長野県中学校連合教科研究会

国語科

I	研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	趣 旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名・・・・・・・・	1～2
IV	研究問題と協議内容・・・・・・・・・・・・・・・・	3～6
V	本年度研究会の反省と来年度の方向・・・・・・・・	7～8
VI	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	8

I 研究テーマ

「生徒が自ら学ぶ言語活動の充実、言語活動の設定はどのようにあったらよいか」

II 趣旨

単元をつらぬく言語活動を通して、付ける力を明確にした指導を中心に据え、生徒が自ら学んでいく授業のありかたを研究していきたい。また、それにとまなう評価をどのようにするか、生徒の姿で明らかにしたい。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

- 第1分科会** 指導者 金井 直樹 先生（東信教育事務所指導主事）
司会者 若山 拓 先生（上田市立上田第四中学校）
記録者 伊藤扶美代 先生（飯田市立遠山中学校）
世話係 古旗 明 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）
- 第2分科会** 指導者 吉越 秀之 先生（南信教育事務所指導主事）
司会者 三石 啓介 先生（飯田市立飯田東中学校）
記録者 中込 郁恵 先生（松本市立島立学校）
世話係 久保 貴史 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）
- 第3分科会** 指導者 宮島 卓朗 先生（中信教育事務所指導主事）
司会者 小沢正太郎 先生（長野市立篠ノ井西中学校）
記録者 熊市 真也 先生（松本市立清水中学校）
世話係 鎌倉 大和 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）

【第1分科会】

上田第四	司会者	若山 拓
上田第二	生徒に「やるべきこと」が伝わる発問	古林芳信
遠山	記録者	伊藤扶美代
塩尻西部	学び合いにより自分の考え(読み)を深め、伝える(表現する)ことができる生徒の育成	佐々木清一郎
南箕輪	文字言語を介して自己表現をし、他人を理解することを通して、文章を読み書きする楽しさを味わう国語教室はどうあったらよいか	古瀬真矢
山辺	心情の変化を中心に(文学的文章) 象徴の概念の教え方	中畠裕次郎
柳町	説明的文章において、表現の仕方を批評するための文章の解釈の段階で、書き換えさせる指導のあり方	石井和馬
更北	主体的に読み、考える力を育てる指導のあり方・説明的文章の学習における単元をつらぬく言語活動のあり方	櫻井莉紗
豊科南	学び合いの中で基礎力を定着させるにはどうあったらよいか	六井直樹
三郷	自ら課題をもち、友と関わり合って高め合う生徒の育成	倉科宗和
丸ノ内	友だちとの意見を交換することを通して、自分の考えを深めていく指導はどうあったらよいか～小グループでの活動を通して～	野原千春
附属長野	作者の思いを今の自分の経験と照らし合わせながら古典を読み深める力を高める指導の在り方	戸塚拓也
附属松本	世話係	古旗 明

【第2分科会】

飯田東	「自分の考え」を明快に持ち、「確かで豊かなかわり合い」を通して、読む力を高める単元展開と、単元を貫く言語活動の設定について	三石啓介
上田第六	読者を明確にすることで、目的意識を持って「書く」こと。また、文章表現をする際の「生徒にとって身近なテーマ」の工夫	伊東睦実
飯綱	その子なりの「思いを深め合える文学的文章の授業」づくり。文学的文章の授業における「読みを深める」ことの中身とは何か	目黒哲朗
原	目的を持って、自分の考えや思いを伝え合う学習の構築。「詩の朗読台本を作る活動」を中心に据えた単元展開。朗読を聞きあう場面のグループ活動の工夫	原加奈子
諏訪西	学びにくさを感じる生徒を少なくするための、「ユニバーサルデザイン化された授業」の構築。ワークシートやグループ学習の工夫から	竹村真実
両小野	生徒が関心を持てるテーマ設定と、筋道を立てて書くための支援のあり方。単元を貫く言語活動の設定や単元展開の工夫について	遠藤茜
豊科北	「考えを伝えあい」ながら、「言葉の意味や働きを発見していく」国語学習。つける力を明確にし、必要性や相手意識を持った多様な言語活動のあり方	角南紀美子
豊科南	「基礎基本の定着はどうあったらよいか	小松洋子
島立小学校	記録者	中込郁恵
附属松本	「読むこと」非言語テキストの読解	久保貴史
小諸東	自ら捉えた新たな語彙を確かに活用していくための言語活動の創造。その活動の中で、いかに生徒に主体性や達成感を持たせていくか	片桐英貴
附属長野	レポートなし	上原杏香 宮澤誠司

【第3分科会】

小布施	生徒の必要感に結びつく知的好奇心の探求心をテーマとする授業・カレンダー作りの活動を通して	松林圭祐
相森	生徒が考える過程を大切にし、読み取ったことを豊かに表現するための学習	伊藤真未
上田第四	読みの深まりを目的とした文学作品の読み取り	船田純一
上田第一	図表を効果的に用いた読み深める指導のあり方	新村しづか
木島平	ことばを味わい読みをひらく授業	頓所本一
永明	登場人物になりきって日記を書くことにより、心情を読み取る活動は、物語の読解の手段として有効であったか	神津紗季
山辺	心情の変化を中心とした文学的文章の読解	藤嶋潤一
清水	記録者	熊市真也
篠ノ井西	司会者	小澤正太郎
附属長野	文学的な文章を評価しながら読み深める力を高める指導のありかた	鎌倉大和 宮澤雅法
豊科南	レポートなし	今溝晶子
丸ノ内	レポートなし	金子貢淑
下條	漢字力、語彙力を高めるための学習	土屋美穂子
附属松本	レポートなし	荒井麻耶

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会記録】

討議1 学び合いを大切にしたいグループ学習の在り方

1 レポート発表

- (1) 平家物語を学習していく際に、生徒の学び合いを深めるために、ホワイトボードを活用し、グループ学習の在り方を追究した実践。(塩尻西部中)
- (2) 盆土産の学習で、登場人物や作者の意図を考え、学習課題を個々に設定するために、お互いのレポートを読み合い、視野を広げ意見交換をする場面を設定した実践。(南箕輪中)
- (3) 故事成語を学習する際に、自分の体験をもとに故事成語を紹介するために、授業のふり返しとしてグループで意見交換をする場面を設定した実践。(丸ノ内中)

2 協議

- (1) ホワイトボードの活用は、グループの意見をまとめやすいし、生徒の主体的な学習に結びついている。3、4人の人数編成ということも大切になってくる。
- (2) じっくり考える課題に対しては、グループで差が生じやすいので、最後に全体でふり返ることを大切にしたい。できる子も友達と意見交換することで気づくことがあった。
- (3) 個人の個性が出るような課題は、グループで1つに意見をしぼることは難しい。グループ学習にもパターンがあるので、目的をしぼって活動するようにしたい。

3 指導者の先生のご指導

グループ学習をすることで子供に力がつかなくてはならない。「グループ活動が授業の中で位置付く」ということは、「何のためにやっているか」ということが生徒に位置付いているということである。「つける力」(目的)の手段としてグループ活動は有効であるが、その「ねらい」と「方法」については、その単元でつける力に沿ったものにしていかなければならない。

討議2 単元を貫く言語活動を意識した説明的文章の読み取りの指導の在り方

1 レポート発表

- (1) 説明的文章を学ぶ上で、単元を貫く言語活動を生徒に意識させることによって、主体的に文章を読み取るための実践。(更北中)
- (2) 難易度の高い説明的文章に挑戦した際、前後の段落を考え、内容理解をしっかりとし、主体的な読み取りに結びつけるための実践。(柳町中)

2 協議

- (1) この教材でいったい何を学ばせたいのか、ということが明確になっていると、単元を貫く言語活動(目的)に向かって、生徒が主体的に読むことができる。
- (2) 難しい説明文も、読む目的がはっきりしていると、生徒は主体的に内容理解をしようと細かいところまで叙述に着目し、読み取りをすることができる。

3 指導者の先生のご指導

これからの国語は「単元を貫く言語活動」をねらいとして授業をしてほしい。説明的文章でも文学的文章でも、「内容理解」に役立てることが大切。文章の内容がわかることが目的ではなく、何をねらってどのような言語活動をするか、ということが問題となる。内容理解の過程でどのような活動をするかが重要である。

討議3 生徒の学ぶ意欲をわき起こすような古典指導の在り方

1 レポート発表

- (1) 和歌の学習で、自分の経験と結びつけて和歌を紹介する文をつくるという実践。(附属長野中)
- (2) 俳句の授業で、5・7・5に空欄をつくり、前後のつながりから推測する「パズルシート」を活用した実践。(三郷中)

- (3) 竹取物語の学習で、音読のサンプルを聞かせ、竹取物語をどのように読んだら魅力的に伝わるか、という音読を中心に据えた実践。(豊科南中)

2 協議

- (1) 和歌の前に添えるエピソードを考えるにあたり、議論したいことを決めだし、話し合いをしたことで意見交換をして自分の考えが深まった。自分の経験と重ねて、古典を読み深めていくことに有効であった。
- (2) パズルシートを使い、前後の関係から言葉を推測していくことで、言葉1つ1つを吟味したり、俳句の情景を想像したりすることにつながった。
- (3) 声に出して音読することは古典ではとても大切。また、音読のサンプルを聞かせたことによって、古典の魅力がどのようにすれば伝わるか、主体的な学びに結びついている。

3 指導者の先生のご指導

古典の指導は、一事項にあたる「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」をA話すこと、聞くこと、B書くこと、C読むことのどれかを通して指導する。例えば、C読むことを通して内容理解する、ではなくどこがおもしろいのか、ということを感じるのだ。ねらいをどうもっていくかによって、楽しい授業はいくらでもできる。ただし、きちんと教えるべきことは教える。「つける力」を明確にすることが第1段階である。

討議4 自己課題・ICTを活用した授業の在り方

1 レポート発表

- (1) どのような場面でどのような発問をしたらよいか。どのような観点で授業をおこなえばよいか。授業改善の方法についての模索。(上田二中)
- (2) 平家物語の導入で、「本文ビュー」を画面に映し、暗唱に取り組んだICTを活用した実践。(塩尻西部中)

2 協議

- (1) 単元全体のねらいが必要で、それを明確にすると授業の流れもしっかりと成り立ってくる。
- (2) デジタル教科書を使用している学校はほとんどない。ICTを使うことでイメージしにくいものを提示することができ、生徒の主体的な学びの手助けになる有効な手立てである。

3 指導者の先生のご指導

ICTを使い、視覚的に提示することで、生徒の主体的な学びに結びつくと考えられる。どのようなICTを使って、何をねらいとして提示するか、ということを確認したうえで使用したい。

文責：飯田市立遠山中学校 伊藤扶美代

【第2分科会記録】

1 国語の学習に苦手意識をもつ生徒たちも自分から学習に取り組み、付いた力を自覚できる授業

(1) 分かったこと、深まったこと

- ・短歌の中の一文字を穴埋めする学習カードは、その一文字に、自分の生活があり思考がある。そのため、思考の理由や見えている景色を説明することができる。また、友だちと交流することで、見えていなかったものが見え共感や別の考えが出てくる。ここでまた、自分の思考を思考し直し、新たな一文字を入れることができる。さらに、文字数を指定しない、他のところを穴にするなどの工夫でまた広がりが出てくる教材。
- ・小説や新聞などの文章から「和語・漢語・外来語」の数を累計し、「単語に分けよう」「語種別比率を完成させよう」という授業は、見通しが明快で自主的・目的的な学習活動となっている。

(2) 課題

- ・短歌の中の一文字を考える学習活動でつけたい力は、正解を入れることができる力ではない。前後の言葉を根拠に、自分なりに解釈した、明快な考えを持つことである。その学習活動でどんな力を付けるのかを共有することも必要なのではないか。
- ・「本文の意味で語句を捉え直すことが語彙力となるか」については、語彙の活用となるのか。

(3) 指導者の先生からのご指導

- ・穴埋めについては、正解不正解を問うものや、各自が入れた言葉（結論）だけでなく、「なぜその言葉を入れたのか」という根拠や解釈を、互いに交流し合いたい。
- ・「和語」で語感を感じさせるとしたら、“比較”することもいい。全部を和語にするとどうなるかを比べる。「だから漢語が使われているんだ」という感覚が大事。
- ・教師側が「こういう姿になれば語彙力がついた」と言える具体的な生徒の姿を明確にすることが大前提。「子どもの意識に沿ってカードを書いていくと、答えにたどり着くのかな」と考えてみると見えてくる。

2 生徒が主体的に取り組むことのできる、「書く力」を高める授業

(1) 分かったこと、深まったこと

- ・実際にりんごを食べて、その感動を担当の先生に伝えるために「おいしい」を使わずに比喻表現をする授業について。実際に食べることで「してみたい。伝えたい。」につながる、体験からのスタートはとてもいい。最後まで子どもたちの意識が続くことにもなる。

(2) 課題

- ・個人の考えを付箋に書いて班で一つ選んだときの、落ちたものの価値付け。また、生徒同士のアドバイスが必ずしも「改善」になるとは限らない。
- ・マッピングは、段落構成の分類までは楽しそうでも、分類したものを文章にするまでの意識には至らなかった。
- ・単級の学校は幼少から変わらない人間関係もあり、新しく「伝えたい」などの意識をもちにくい。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・「書くこと」の言語活動では、様式がそれぞれ違う。構成の力をつけたいのであれば構成を考えるようにし、課題設定や取材などに大きな力を使わせない。「書くこと」のプロセスのどれか一つをやること。
- ・様式については、例えば「宣伝文」となると、宣伝文の特徴をしっかりと捉えること。材料を集める取材ができる力となると、ここは教師が与えず、子どもが考える。

3 単元を貫く言語活動

(1) 分かったこと、深まったこと

- ・単元を貫く活動をしていくためには、入りが大事。「今日はここから読みます。」ではなく、子どもたちが読んでみたいと思えば自然と読み進めていくような導入部分を大切に作る。
- ・時代背景をいつ扱うかについては、教材によっては教科書に書いてあるから自然に目に入る場合もあるし、気づかせたいところでこちらが意図的にしかけをつくっていく。

(2) 課題

- ・詳しく読解してからの音読か、音読をしながらの読解か。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・小学校3・4年の目標から「目的に応じて」という言葉が入る。つけたい力をつけさせるために単元を貫く言語活動を設定する。この言語活動は、実生活に生きる、社会性につながる「目的に応じて読む」を保証するためのものでなければならない。例えば「帯をつくる」授業で、第1次で子どもが「帯をつくるためには」と見通しをもつこと、第2次ではその言語活動に必要な言語活動（様式など）を遂行すること、第3次では自力で取り組む。そこで求められるのは並行読書。

4 読解における“深まり”や“高まり”とは何か

(1) 分かったこと・深まったこと

- ・子どもの考えがてんでばらばらに出てきたときに、教師の捉えにもっていくのではなく、子どもたちの思いをもっと大切にしたい。
- ・テストの作り方を変えていく必要がある。根拠から自分の考えが構成できる力が必要。

- ・実際の場所を教師が訪れることで得られる意識や教師自身の体験は、子どもに直接おろすものというより、子どもたちの考えを受け止める振り幅ができるようなものになりたい。

(2) 課題

- ・考えを交流し合って深めたり高めたりできても、結局子どもから正解を問われることもあり收拾がつかないこともある。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・テストは、選択肢であっても記述式であっても、出てきた答えをみてその子がどういう読み方、書き方、話し方になっているのかをたしかめるために、教師側が意図して作ること。
- ・単元を通していつも“それ”が効いていることが大事。

5 指導上の悩みや課題

(1) 出された話

- ・声が小さい、出ていないということを本人にわからせるには、ビデオに撮って自分の姿を見せる。相手意識を持たせるのもよい。大事なことから大きい声で言った方がいいよと伝える。
- ・誤読については、根拠を丁寧に聞いていく。突きつめていけばたいていは誤読の原因がみえる。

(2) 指導者の先生のご指導

- ・1時間の授業のつくりは「この子が1時間を通してこうなる」ことを目指してやっている。例えば「魚を釣りたい」→活動→「魚を釣れた」で考えると、シロギスとクロダイでは必要な活動が違う。発問でもその必要な活動を誘発する。
- ・「伝えたい」と思っているから声が届く。話すことによって確かに問題解決になることになる、人の言うことを聞くと問題解決に迫れたということに至った子どもたちは、話す、聞く。聞く側を育てることも大事。そして、これは全ての活動に同じ。

文責：松本市立島立小学校 中込郁恵

【第3分科会記録】

1 読みを深める指導・教材化、言語活動の充実のための手立て・設定について

(1) 協議してわかったこと、深まったこと

- ・翻訳作品を読むとき、同じ訳者の違う訳を読み比べることで、訳をあえて変えた訳者の意図を読み取る授業の構想。
- ・言葉に象徴されるものを読み解いていく授業の難しさ。
- ・文章作品だけを追うのではなく、音楽を合わせることで、更に登場人物の心情に迫ろうとする活動。
- ・子どもが「気になる叙述」は、自分の考えや体験と重なったり、逆に重ならない部分。
- ・読みの学習でも、心情曲線を描いた理由について叙述に合わせて語り合うなどの話し合い活動を、積極的に取り入れていくこと。
- ・群読をしていく学習で、どうやって読めばいいのかを話し合い、その根拠を本文に求めながら学習していくことは有効。また、同じ部分を違う表現で読んだ班を比べてみるのも言語活動の設定に有効なのではないか。
- ・授業の中で取り組んできた作品を残していくことで、生徒自身に「こういう力が付いた」と自覚させることができる。
- ・白文帳での漢字学習の進捗状況をグラフにして表すことで、子どものモチベーションを高めることができる。

(2) 今後の課題

- ・言語活動を活発にするグルーピングについて、学習に応じて工夫していく必要がある。
- ・その時間につける力を、より明確にしていかなければならない。

- ・言葉の意味，作品の解釈についての教材研究をより深める必要がある。
- ・「何となく」という気持ちで読んでしまう生徒に，その根拠をしっかりと持ってもらうために，どのような手立てを講じていくことが重要なのか。
- ・生徒自身が，ついた力を実感できるような工夫をしていきたい。
- ・漢字への親しみを持たせ，漢字の力を伸ばしていく学習をつくり上げるためにはどうしたらよいか。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・自分の考えの根拠となる叙述を明確にしつつ，その理由が妥当かどうか判断できるような話し合いができると，作品を評価することにつながるのではないかと。
- ・主題は読者によって違うものだから，基本的には授業で直接的に扱わない。生徒が感じたこと，考えたことの根拠や理由を大切に話し合うことが大切。
- ・話し合いの中では共通点と相違点を大切に，根拠や理由，考えをつなげていくこと。話し合いの中で「あれ？」「ちょっと友達と話させて」となった時，学びが始まっていくのではないかと。
- ・作品の続きを書く活動をするのであれば，どのような力をつけるために行う学習なのかをはっきりさせること。
- ・学習の成果を表現することは重要である。その「成果物」自体を評価することはもちろんだが，探究してきた過程の学び，つまり，一時間ずつしっかりとつける力を吟味し，評価していけるようにする。
- ・テストだけを動機付けにすると，できる生徒は意欲的に取り組むかもしれないが，苦手な生徒はずっと苦手なままになってしまう可能性がある。漢字に親しんだり，漢字を用いた語彙を広げていきたいという意識を持たせたりして，漢字練習に臨ませたい。

文責：松本市立清水中学校 熊市真也

V 本年度の反省と来年度の方向

◎本年度の反省

項目	内容
○本年度の研究テーマについて	○よい
○研究の主な内容と研究の成果について	○特記事項なし
○研究の方法や経過について	○特記事項なし
○研究会当日の運営について	○特記事項なし
○研究集録等の Web ページ掲載について	○前年のレポート例を，数例挙げていただけるとありがたい。
○本年度運営全般について	○特記事項なし

◎来年度の方向

○来年度の研究テーマ	○継続の方向
○来年度の研究の趣旨	○特になし

